

主イエスは、37節で「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」と言われました。主イエスが言われたのは、喉の渇きではありません。心の渇き、魂の渇きのことです。ヨハネ福音書ではすでに、4章で、サマリアのシカルの町のヤコブの井戸で旅に疲れた主イエスが座っておられた時、一人の女性と出会い、主イエスは彼女に「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（4章14節）と約束されました。ユダヤ人にとっては異教徒であるサマリアの女性に永遠の命をもたらす水を飲ませるといふのは、ユダヤ人であるイエスの弟子たちにとっては、びっくりする話であり、そのように語る主イエスの真意は弟子たちにとっても、律法学者たちやファリサイ派の人たちにとっては理解不可能なことだったはずで

今日の聖書箇所は、仮庵の祭りで起きた出来事の続きです。仮庵の祭りは過越祭や五旬祭と並ぶユダヤ教の三大祝祭の一つです。10月初旬頃に行われる祭りの期間、ユダヤ人はテントを張ったり、枝や葉で仮の小屋を建てて、そこで過ごします。エジプトを脱出したイスラエルの民が荒れ野で天幕生活を送り、カナンの地への旅を40年間続けた際に、絶えず神の守りあったことを思い起こすためです。ユダヤ人が多く住むニューヨークでは、ユダヤ人たちがマンシヨンのペランダに段ボールで仮りの小屋をつくって、小屋の代用にするそうです。そして、カナンの地に定住して農耕を始めた時、この祭りは秋の収穫を感謝し、雨を求める祭りになったのでした。

かつてイスラエルの民は、見渡す限り岩と砂、水などどこにもない荒れ野で渇きを覚えました。モーセが神に命じられた通りに岩を杖で打つと、そこから水が湧き出て、民は十分に飲むことができました。それを記念して、仮庵の祭りでは水注ぎの儀式が行われました。このような歴史的な出来事が背景としてあるため、イスラエルの民は救いの水を与えてくれるメシアを待ち望んだのです。

仮庵の祭りの最終日（37節）には、祭壇の周りを7周して、救いに預かる熱気はピークに達します。そのような人々に対して、主イエスは大声で「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」と語られました。ここまでの主イエスの言葉は、旧約聖書の出来事を背景にした言葉ですが、次に、「その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」（38節後半）と語るのです。この箇所の説明書きが39節に続けて出てきます。「イエスは、御自身を信じる人々が受けようとしている霊について言われたのである」とあるように、この「生きた水」が神から下される聖霊であることを指し示して、聖霊が降り降ることを暗示する言葉を告げているのです。ここで注目したいことは、聖霊を受けた者の内から生きた水⇨聖霊が川となって流れ出るようになる、という言葉です。つまり、イエスが十字架上で殺され、復活された後、召天した後に降って来た聖霊を受けた者が、ただ単に聖霊を受けた状態にとどまるのではなく、聖霊を受けた人自身から聖霊が川のように流れ出る存在になるということです。

このように主イエスがここで語っている内容は、従来の聖霊理解を越えるものです。聖霊は、聖霊を授けられた信仰者を生かして導くだけでなく、その人自身から聖霊が外にあふれ出ていくというのです。ここに、信仰者のこの世における基本的な働きが示されているのです。私たちは、洗礼を受けた時、聖霊を神から降されているのですが、そのような聖霊を授けられた者が、今度は聖霊がその人自身からあふれ出ていくのだということです。

私たち信仰者は、聖霊を受ける受け身の存在であるかのように考えがちですが、神が降された聖霊は、単に、信仰者の内側に働きかけるだけで完結するようなものではなく、その信仰者を用いて、神の意志である聖霊が他の人に働きかけていくというのです。ですから、信仰者は、神の意志を受け取る単なる客体の存在にとどまらないのです。逆に、神の意志としての聖霊を他者に注いでいく主体的な存在になっていくというのです。このような聖霊に関する主イエスの宣言は、私たち信仰者に勇気を与えます。洗礼を受けても、日頃の自分自身の弱さを嘆きがちな私たちではありますが、聖霊は私たち信仰者を用いて、神の意志を多くの人たちに注いでいく器となつて日々私たち信仰者を用いているのです。もちろん、信仰者であることに過剰な自信を抱いて、他者に対して高圧的な態度で接することは敵に慎むべきことですが、つい自分自身の弱さを嘆くあまり、神の意志が自分の人生に現わされていないかのように受け止める必要はないのだということが、ここでの主イエスの言葉は教えているのです。

魂の渴きは、洗礼を受ければたちまち癒されて、魂の渴きが満たされると考えがちですが、実は、洗礼を受けて聖霊を受けとったことで、それまでの社会的に満足する価値観が捨て去られることになります。生きる方向性が本質的な事柄に目覚めさせられるために、どのように生きていくべきかが切実な問題として、信仰者自身の中で問われるようになっていくのです。ですから、それまでのこの世的な価値観で一時的に満足することができなくなるために、より神の意志を追い求めるようになるのです。例えば、良い学歴を追い求めることやお金持ちになることが自分の目指す本質的な価値観ではなくなるのです。

逆説的ですが、聖霊を授けられることで、この世的な価値観ではない、本質的な事柄に気づいたことで、自分の弱さや欠けに敏感になるのです。ゆえに、その弱さや欠けにこそ神の意志が現わされていくのです。弱さや欠けを自分の信仰的な不足として認識するのはなく、神の御業が働く良き機会だと受けとめ直すことができるならば、神は聖霊を豊かに注いで、導きが与えられている恵みに気づかせてくれるでしょう。自分の弱さや欠け気づくとき、それは、この世的には挫折であったり、他者との軋轢がそうさせるのですが、「なんでこんなことが自分に起こったのだろう」と考えてしまうのが私たち信仰者にも起こるのです。どれだけ挫折や失敗があったとしても、それだけでがっかりすることはありません。何事にも意味のないことはないからです。挫折や失敗の出来事にも聖霊の働きがあるのです。聖霊は自分にとって都合のよいことだけを導くものではありません。挫折や失敗の背後にも神の意志としての聖霊の働きがあるのです。なぜなら、そこには神の赦しと御計画があるからです。そのような聖霊の導きに気づいた者が今度は、自らの内側から聖霊があふれ出ていくのです。